

# 『メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する考古学的研究』

市川 彰

(国立民族学博物館外来研究員・日本学術振興会特別研究員 PD)

本発表は拙論(市川 2012a; 2012b)を骨子としている。本発表ではデータを追加し、解釈の深化を図るとともに、参加者各位からの貴重なご意見を頂戴し、発展的な議論へと展開したい。

## ■研究背景と残されている課題

「古典期」とは、メソアメリカ地域各地の社会が著しく発展する時期と位置づけられている。しかし、特にマヤ地域にみられるように「先古典期」には古典期に特徴的な諸要素が各地ですでに出現している。こうした考古学的事実はマヤ文明の起源論や先古典期社会と古典期社会の特質を再考することを促した (cf. 青山 2013; Sharer 1992; Grube 1995; Houston and Inomata 2009)。

神殿ピラミッド・石彫・文字・暦・王墓などの存在は支配層や階層的な社会を連想させる。では、いつ頃から突出した特定個人(または集団)は出現し、その後どのように社会の階層化は展開していったのか。これは古典期社会を考究する上でひとつの重要な問いである (cf. Joyce 2004)。本研究では墓に着目する。墓は往時の社会的側面を考察する上で最良の考古資料の一つだからである。先行研究では、王墓クラスの墓に焦点があてられていたため、支配層のみが過渡に強調される傾向にあった。既出の墓資料を可能な限り渉猟し、より実態に即した社会像を構築する必要があるだろう。このとき、「先古典期」または「古典期」という枠組みにとらわれるのではなく、その枠組みを一度解体し、より長期的な視野に基づきその通時的变化や画期を捉えることが必要であると考え。また、テオティワカンやモンテ・アルバン、マヤ地域の各都市など、ほぼ同時期にメソアメリカ各地の都市が興隆していたことを加味すると、地域間の比較検討も視野に入れる必要があるだろう。

上述した問題をマクロレベルの視野と位置づけるならば、ミクロレベルの事象についても着目したい。メソアメリカ各地において大小さまざまな遺跡が調査され、遺跡レベルあるいは地域レベルの研究が進展した結果、メソアメリカ各地域の多様性や地域固有の発展過程の解明が重要視されてきているからである (Joyce 2004)。こうした研究動向をうけて、本研究では発表者がフィールドとするメソアメリカ周縁地域に位置するエルサルバドル(チャルチュアバ遺跡など)の事例を中心に、先古典期から古典期への社会変化について考究し、周縁からのメソアメリカ古典期社会の形成過程の理解にアプローチしたい。

## ■研究目的

本研究の目的は以下の3点である。

- 1) 先古典期から古典期にかけての社会の階層化の過程とその背景を墓制から明らかにすること。
- 2) 先古典期から古典期にかけてメソアメリカ周縁地域社会はどのように変化していったのかを明らかにすること。
- 3) メソアメリカ各地域の古典期社会の形成過程の特質を明らかにすること。

## ■研究方法

以上の研究目的を達成するため本研究では以下の2つの方法を用いる。

### 1) 墓制研究

墓は社会の階層化や複雑化について考える上で有効な資料である。しかし、A・ルスやB・ウェルシュ (Ruz 1968; Welsh 1988) を除いては、広域的な視野で墓制研究を展開した例はない。本研究では比較的まとまった資料が得られるマヤ地域、メキシコ中央高原、オアハカ地域の3地域を対象として、墓制の通時的変化を把握する。「墓への労働投下量の大小が社会的地位を反映する」という前提条件をもとに、墓壇構造、副葬品の種類数の多寡、威信財の副葬率の相関関係について通時的に概観し、社会階層化の過程とその背景について考察する。

### 2) エルサルバドル共和国における考古学調査

エルサルバドル共和国西部に位置するチャルチュアパ遺跡は、先古典期から後古典期にかけて継続的な人々の居住がみられることから、通時的研究をおこなう上で恰好のフィールドである。また、先行研究から、オルメカ、テオティワカン、マヤなどの影響がみられることやマヤ文明の起源論とも関連することから (cf. Sharer 1978; Gifford 1976)、学史上重要な遺跡のひとつと位置づけられている。本研究では、近年のチャルチュアパ遺跡の発掘調査成果を軸として、建造物、土器、墓制、石彫などの各遺構・遺物の総合的分析から、先古典期から古典期への社会変化について考察する。

## ■研究成果

### 1) 墓制からみたメソアメリカ地域の社会階層化

#### マヤ地域

本研究では、R・Adams (1977) の地域区分を参考にし、1) ペテン・ベリーズ地域、2) ウスマシンタおよびパシオン川流域、3) ユカタン地域、4) 南東地域、5) 南

部地域の約 2000 基の埋葬資料を対象として分析をおこなった。多少の時期差・地域差はあるものの、少なくとも先古典期中期・後期には支配層の出現と階層分化がおこるが、上位階層者の突出はあくまで単発的なものであり、必ずしも固定的な階層社会は想定されず、緩やかに成層化していく様子がうかがえる。他方、古典期には階層の二極化ともいえる状況が各地域で生じる。しかし、その二極化の内実が地域によって異なることが、威信財の副葬割合から想定された。

#### **オアハカ地域（モンテ・アルバン）**

オアハカ地域はモンテ・アルバン遺跡を中心として約 700 基の埋葬資料を対象として分析をおこなった。マヤ地域同様に、先古典期中期・後期頃から階層分化がおこるが、必ずしも突出した階層上位者を想定することはできない。先古典期終末期から古典期前期、古典期後期にかけて、階層の二極化現象がみられる。ただし、先古典期終末期から古典期前期の場合には上位階層者間の競合関係が二極化を進行させ、古典期後期にはまさに中央集権ともいうべき状況が二極化を生じさせており時期ごとに異なる状況が読み取れる。

#### **メキシコ中央高原（テオティワカン）**

メキシコ中央高原はテオティワカン遺跡を中心として約 1000 基の埋葬資料を対象に分析をおこなった。先古典期についてはほとんどわかっていないため分析は不可能であったが、古典期についてはマヤ地域やオアハカ地域とは異なる結果が得られた。現時点では突出した個人墓が出土していないことはそのひとつである。本研究では先行研究と埋葬出土地から 9 地区にわけて分析をおこなったが、各地区間にさほど有意な差異は看取できなかった。ただし、トラミミロルパ期からショラルパン期（200～550 年）にかけては各地区内の墓制に複雑化がみられることから、各地区内の階層分化が進行したものと考えられる。

## **2) 先古典期から古典期にかけての地域固有の社会変化**

はじめに、これまでの調査成果をもとにチャルチュアパ遺跡における建造物群の変遷を整理し、議論の根幹をなす編年の整備をおこなった。そのなかで、特にイロパンゴ火山灰の出土状況とその前後の土器型式の変化に着目し、火山噴火は紀元後 400 年頃であること、少なくとも従来いわれてきたような火山噴火の強い影響は看取できない、つまり継続的に人々の活動が存在したことが指摘できる。

つぎに、建造物、墓制、石造記念碑にみられる変化、外部要素の出現過程から紀元後 300

～500年頃、つまり先古典期から古典期にかけて変化の画期が見いだせることが明確になった。この時期はテオティワカンの影響力が増大し、カミナルフユやコパンなどにおいても社会的画期をむかえるため、社会変化と外部からの直接的な人々の動きとを結びつける傾向にあった。しかし、チャルチュアパにおける各文化要素の変化、外部要素をもつ遺構・遺物の特徴、ストロンチウム安定同位体比分析の結果から、あくまで変化は社会内部の人々を中心となって起ったものと解釈することが可能となった。

換言すれば、チャルチュアパにおける先古典期から古典期にかけての社会変化は、テオティワカンやマヤ地域からの直接的な支配や移住によって引き起こされるのではなくチャルチュアパが他地域の変化に対応するために外部要素を選択的に受容し社会を再編成しようとする能動的な適応戦略の結果を示すのである。

## ■まとめ

メソアメリカ各地の先スペイン期社会は共通する文化要素や思考（志向）を有しているが、複雑多岐な歩みを経てきたことは自明ともいえる。本研究による墓制からみた社会階層化に関する研究は、それを単に再トレースしただけという評価もできよう。しかし、階層分化が緩やかにすすみ、最終的に二極化が達成されるのが古典期社会であり、その二極化への道程が異なることを墓制という観点から明示することができた点はひとつの成果と考える。

チャルチュアパ遺跡の調査成果を核とした周縁地域社会の研究の成果は、「中央・周縁」という単純な図式からの脱却を志向する近年の研究動向を反映する形ではあるものの、研究対象地域の社会像を若干ながら刷新した点に本研究の意義を見いだすことができる。

また、周縁が中央に直接左右されない主体性を有するならば、中央もその主体性を有する。文化的・政治的・経済的側面において外部とのかかわりを多分に共有しながらも各都市あるいは各地域の独自性が保持されていた。階層化の過程にみられた地域差もまたこうしたメソアメリカ各地域における独自性の保持という観点から説明することができるのではないだろうか。

## 参考文献

Adams, R.

1977 *The Origin of Maya Civilization*. University of New Mexico Press, Albuquerque.

青山和夫

2013 『古代マヤ-石器の都市文明』 諸文明の起源 11 (増補版)、京都大学学術出版会：京都。

Gifford, J.C

1978 *Prehistory Pottery Analysis and the Ceramics of Barton Ramien in the Belize Valley*.  
Peabody Museum Memoirs 18, Harvard University, Cambridge.

Grube, N. (ed.)

1995 *The Emergence of Lowland Maya Civilization –Transition from the Preclassic to the Early Classic*. Acta Mesoamericana No.8 Verlag Anton Sauwein, Germany.

Houston, S.D and Inomata, T.

2009 *The Classic Maya*. Cambridge University Press, Cambridge.

市川 彰

2012a 「メソアメリカ南東部における先古典期から古典期への社会変化」『古代文化』第  
64 卷 2 号、117-136 頁。

2012b 「先古典期から古典期にかけてのマヤ南部地域の墓制と社会」『古代アメリカ』  
第 15 号、1-32 頁。

Joyce, R.A.

2004 Mesoamerica: A Working Model for Archaeology. *Mesoamerican Archaeology*, edited by  
Hendon, J.A. and R.A. Joyce, pp.1-42. Blackwell, Oxford.

Ruz, Alberto

1968 *Costumbre Funeraria Maya Antiguo*. Centro de fondo y económico

Sharer, R.J.

1978 *The Prehistory of Chalchuapa*, El Salvador.

1992 The Preclassic Origin of Lowland Maya States. *New Theories on the Ancient Maya*,  
pp.131-136. University of Pennsylvania, University Museum of Archaeology and  
Anthropology, Pennsylvania.

Welsh, B, M.

1988 *An Analysis of Classic Lowland Maya Burials*. BAR International Series 409, Oxford.

ティワナクの存在論的理解はいかにして可能か？  
—ティティカカ湖盆地南西岸のパレルモ遺跡における  
ティワナク様式物質文化とその社会的位置づけ—

佐藤吉文

(南山大学人類学研究所・非常勤研究員／国立民族学博物館・外来研究員)

## 1. 研究の背景

ティワナク（紀元後 500～1150 年）は先スペイン期アンデスにおける初期国家の一つに数え上げられる社会として、1980 年代半ばから約 20 年にわたってアンデス考古学の重要な研究対象としての地位を獲得した。とりわけ、その首都と目されるティワナク遺跡を中心として実施された集約的かつ広域的な発掘調査は、この遺跡を中心とした政治社会構造を具体的に解明するのに必要な考古学資料の蓄積に大きく貢献した。その資料にもとづいたとき、ティワナク中央集権国家説は、現在最も有力なティワナク理解である[Janusek 2008]。

このティワナク国家がどのような地方支配戦略を採ったか、という問題はアンデス初期国家研究の重要な主題であるが、実はティワナクの地方支配の在り方を示す考古学資料は必ずしも多くない。たとえば、ジャヌセックがティワナク遺跡からの物理的な距離の応じて便宜的に採用した「内核域 Inner Core/外核域 Greater Core/近縁域 Near Peripheries/遠縁域 Far Peripheries/境界域 Frontiers」という区分がある。このうち、ティワナク国家が事実上領域的に支配したとされる近縁域までの範囲において、具体的な社会変化を実証的に示すに足る考古学資料が示されたのは、内核域 1 遺跡、近縁域 1 遺跡の計 2 遺跡しかない[Bermann 1994; Janusek 1994; Seddon 1998]。この発掘調査の不足を補ってティワナクの地方「支配」の根拠となっている考古学資料の大部分は一般踏査とその際に行われる極めて小規模な試掘調査なのである。その意味で、ティワナクによる具体的な地方支配の性格はほとんど実証されていない。このような状況の中で求められるのは、現行のティワナク国家モデルを具体的な資料によって検証し、検討する姿勢である。

その一方で、筆者がかねてから疑問に思っているのは、政治的現象という側面を超えたとき、ティワナク国家という現象が先スペイン期アンデス史のプロセスのなかに必ずしも連続性を持たない点である。ティワナクが衰退し、その物質文化が失われていく中で、とりわけ国家の中心であったティティカカ湖盆地では新しいマテリアル・ランドスケープが編成され、アルティブラノ期が到来する。しかし、その編成のプロセスはこの画期を特徴づける重要な要素でありながら、これまで十分に検討されていない。ティワナクの文明史的意義を理解するうえで、この問題は極めて重要である。

## 2. 本論の目的

以上のような問題を踏まえて、本研究では次の二つの目的を設定している。

- ① パレルモ遺跡の発掘調査の成果にもとづいて、ティワナクの地方「支配」の構造を実証的に論じること。
- ② ティワナクを実践論/存在論的にモデル化すること。

本発表では、目的①について簡単に示したうえで、目的②について論を展開する。

### 3. パレルモ遺跡

パレルモ遺跡はペルー共和国プーノ県チュクイト郡の郡庁所在地フリの南西約 3 kmに位置する。先土器時代末期から植民地期初期までを通じて利用されていたことで知られ、その面積は 12ha に及ぶ[Stanish et al. 1997]。遺跡の中心をなす丘陵頂部には地表に大きな落ち込み地形や両面壁に囲まれた五角形の構造物址が確認できる。筆者による発掘の結果、落ち込み地形は半地下式広場であることが確認された。

従来の解釈では、ティティカカ湖南西岸に成立したシユモッコ政体の中心であると考えられている[Stanish et al. 2005]。

### 4. ティワナクの地方「支配」構造—パレルモ遺跡の視点から

本研究では、それぞれの目的にそって一つの資料群に対して複数の異なる方法論を採用しているが、目的①に用いているのは、権力論あるいは政治経済的視点からの考古資料解釈である。

#### 土器からみたパレルモとティワナクの関係

胎土分析では、パレルモ遺跡に搬入されたティワナク様式土器の起源が中心/周辺という二分法では分類できない多様性を示すことを明らかにした。仮に外来土器の搬入元が一定の政治的権威を示すもの、あるいはティワナク・イデオロギーの伝達手段だとすれば、ティワナク様式土器で示される権威は地方における模倣だけでなく、模倣先の多極化を通じても脱構築されていることになる。また、胎土分析によれば、ティティカカ湖盆地南西岸におけるティワナク期の在地産土器の物流度がティティカカ湖盆地南岸のティワナク勃興直前の時代のそれより限定的である傾向にある。ティワナク期のティティカカ湖南岸の物流度については検討の余地があるが、それがティワナクの勃興によりさらに活性化したとするならば、分析の結果は、そうしたインタラクション・スフィアの浸透がティワナク勃興前夜の現象であったことを示すとともに、それがティティカカ湖盆地南西岸には同様のレベルまで及ばなかったことを示すことになる。

#### 祭祀空間とティワナク

一方、祭祀空間における半地下式広場は、形成期後期からティワナク期にかけて再設計を伴って利用されたものの、ティワナクの権威は広場の拡張などの現象を生まず、可能性

としてアクセス方向の変更あるいは多元化を伴った。また、半地下式広場はティワナク期の終末に先駆けてすでに「放棄」され、その後、埋葬空間へと転用された。墓の一つから出土した副葬土器にアンデス西麓モケグア地方のトゥミラカ様式土器に特徴的な器形が現れていることから、広場の放棄は紀元 950-1050 年までに始まったと思われる。

#### 4. 小結①：パレルモの物質文化にみるティワナク

- ① ティワナクにおける半地下式広場の再設計は規模の拡張は伴わないものの、アクセス方向の多様化を伴った。それは儀礼空間の再編とみることができる。
- ② ティワナク様式土器はティワナク遺跡だけでなく、ほかの遺跡で製作されたものも搬入された。
- ③ 湖南地方のインタラクシオン・スフィアから湖の南西岸域は切り離されている。

中央から見れば、①イデオロギーの組み込み、②威信在の制限、③一方的な経済的搾取と解釈されうるし、地方の視点に立てば、①国家イデオロギーへの抵抗、②国家権威の脱構築、③経済的自立と解釈することができる。おそらくどちらかの解釈が正しいのではなく、いずれの解釈も正しい。

#### 5. 存在論的ティワナク理解へ

このように、考古学調査の増加は新しい資料の蓄積を生む。その一方で、新たな調査研究によって提示される膨大な量の考古学データを統一的に理解する視点が欠如すると、考古学者による資料理解はますます個別主義的陥穽に陥る危険を孕む。とりわけ、政治経済的アプローチにもとづいた国家研究では、その傾向が強い[こうしたアプローチへの反論は Isbell 2010]。

これに対し発表者は、近年アンデス考古学でもみられるようになってきた実践論や存在論にもとづいた考古学研究[Bray 2009; 松本 2013; Moore 2010; Sillar 2009]にこの陥穽を回避する契機を見出す。いずれの研究においても、「いつ」、「だれが」、「どのように」「どんな」行為を行い、物質文化がそこにどのような関係を切り結んだのかという問題を焦点化する。これによって、ハイメ・カスティージョはこのような視点をサン・ホセ・デ・モロにおけるワリの物質文化の理解に導入して、ワリとモチエの関係について興味深い論考を展開しており[Jaime Castillo 2012]、政治経済的アプローチに代わる国家社会のモデル化に光明を投げかける。このとき、本研究では、ひとまずパレルモ遺跡の祭祀空間の形成プロセスにみられるティワナクの社会的意味を、「空間＝景観」、「埋葬＝身体」、そして *kamay* という要素に着目して存在論的に検討する。そのあとで、この分析視点を中央アンデス南部に横断/縦断的に適応しつつ、ティワナクの存在論的理解に向けた議論を拓く。

#### 6. パレルモ遺跡における祭祀空間の変遷過程とティワナクのオントロギア

発掘調査では、パレルモ遺跡の半地下式広場が複数の行為によってその空間的性格を変えていることが判明している。

たとえば、半地下式広場は①地山の掘削、②砂の搬入と敷設、③石壁づくり裏込め、④床の設置である。砂はおそらく湖畔あるいは河岸から持ち込まれた資源であり、空間と水資源との結びつきを表象したものであろう。しかし、すくなくともティワナクと関連するかたちで広場には大量の廃棄行為が行われた。この廃棄行為の開始にあたってはケヤ様式の人面装飾甕とネコ科動物の造形装飾を伴った香炉が広場のほぼ中央に埋納された。大量の炭化物が詰まった香炉は土の詰まった甕のうえに置かれていたことから、甕は二次的に埋納されたことがわかる。したがってこのとき、廃棄によって埋められる空間だけでなく、廃棄行為や廃棄物そのものが儀礼的に聖別されたことになる。重要なのは、広場の石壁との層位学的位置関係を考慮すると、この廃棄層の上面は広場の活動位相でもあった点である。したがって、廃棄行為と広場放棄は直結しない。

ここで注目すべきは、このとき、埋納に用いられたのはティワナク様式土器ではなく、時代的にそれをさかのぼるケヤ様式の儀器であった点にある。すなわち、ティワナク様式の物質文化はそれ以前の「伝統的な」物質文化のオントロジーと対等ではなく、好まれたのは在地の粘土で製作された土器、在地の *kamai* であった。

広場はその後、埋葬空間へと転用される。しかし、広場内に設けられた埋葬施設は上述した廃棄層のうえに突き出ているため、埋葬空間への転用に先立って、広場の放棄が行われたと考えられる。このとき、空間の儀礼性は埋葬空間への転用に先立って短期間の「断絶」を挟むのである。パレルモ遺跡では、このときはじめてこの空間が死者の「身体」に結び付けられる空間になる。そして、埋葬空間の成立後、インカ期までに広場の北東部には小さな基壇が造られた。広場の角を利用するように基壇内には墓が設けられたことから埋葬に伴う儀礼基壇であった可能性が高い。基壇前面には何らかの燃焼行為を伴った痕跡が認められるのである。

ティワナクの二次センターであったルクルマタ遺跡の半地下式広場では、ティワナク期後期半ばに放棄されたのちも石材の転用は認められるものの、埋葬空間としては用いられていない[Bennett 1936; Rivera Sundt 1989]。したがって、ティワナクの広場というマテリアリティはそこに強く残されている。しかし、パレルモ遺跡ではティワナクの広場というマテリアリティは「放棄」という「断絶」をへて別の儀礼的空間を生成する。ここに埋葬という実践を経て「身体」を通じた場の認識が成立するのである。「身体」と場の結合は、その後、チュルパが広場を含めた遺跡中に造られることでさらに強化された。

ここで、パレルモ遺跡では、この空間に特殊性を付与する景観が二つある。その一つはセロ・プカラの存在である。広場から見て北東にそびえるセロ・プカラはこの地方でも強力なアプのひとつで、筆者が採録した民話では女性性の付与された存在である。その理由は、この山のふもとに豊富な湧水であり、パレルモ遺跡の北東側にもその湧水口がある。一方で、パレルモ遺跡の西端には広場や石壁構造物の残る平坦部より一段たかい堆積岩の

露頭が突き出ている。このような「アプ、水、基壇を伴う儀礼空間、埋葬」にワカが組み入れられた景観は、インカ期のクスコ地方においてみられる儀礼的景観のひとつをなしている。たとえばクスコ県アンタ郡の Quillarumiyoc 遺跡周辺にみられるマテリアル・ランドスケープがその例で、聖峰 Soqomarka からの流水が遺跡内部に引き込まれ、その周囲にはワカと墓が存在する。

このような景観が、パレルモ遺跡では半地下式広場を埋葬空間へと転用する行為をへて段階的に形成されていった。このとき、ティワナクのオントロギアは広場という機能の放棄をもって排除されたと考えるべきではないだろう。広場の内部に埋葬施設が造られはじめたのは偶然の産物であるかもしれないが、その後、墓を埋め込んでさえ広場の壁をというランドスケープを維持し続けたのは、この広場という物性が埋葬という行為と不可分であったためである。また、盗掘による重度の攪乱を受けてはいるものの、埋葬の際にはティワナク様式土器も副葬品としてもちいられた痕跡が見られる。しかし、この地下墓という性質はインカ期の祖先崇拜と直接結びつくものではなかった[Isbell and Korpisaari 2012]。ティワナクのオントロギアは副葬品というかたちでも埋葬実践を形成し、次代のオントロギアの成立に深く結びついていたのである。

## 6. 結論

ティワナクの地方支配の在り方を検討するとき、政治経済的アプローチを中心とする従来の方法論では研究者個々人が採用するパースペクティブの違いによって、中心あるいは周辺という地理的区分を基礎として議論を展開する傾向が強い。しかしながら、そのような方法論は、全体論を展開するにあたってそれぞれのコンテキストの差異を回収しきれず、個別主義的な資料理解による現象の断片化を生み出す。その結果、分析されるべき現象は政治的事象へと矮小化し、その文明史的意義は必ずしも十全に理解されていないように思う。

本研究は、この問題を克服する手立てとして存在論的視点に立って、ティワナク国家の共時的オントロギアと通時的オントロギアへと読み替える試みを展開した。資料の蓄積により、そのオントロギアも修正を迫られるであろうし、批判もされよう。しかし少なくともティワナクという現象の文明史的意義は、政治経済的アプローチによる共時的オントロギアと存在論による通時的オントロギアと組み合わせることで新しい理解を生むとともに時間性を獲得するのである。

最後に、一言で本研究の結論を述べるならば、

「パレルモ遺跡におけるティワナクのオントロジーとは、現在まで至るアプ信仰を中心としたコスモロジーに「身体」を直結させた舞台装置としての役割を偶然的に生み出した要素であった。」

【参考文献】

Bennett, Wendell C.

1936 Excavations in Bolivia. Anthropological Papers of the American Museum of Natural History 35(4) : 329-507.

Bermann, Marc C.

1994 Lukurmata: Household Archaeology in Prehispanic Bolivia. Princeton University Press, Princeton.

Bray, Tamara L.

2009 An Archaeological Perspective on the Andean Concept of Camaquen: Thinking Through Late Pre-Columbian Ofrendas and Huacas. Cambridge Archaeological Journal 19(3) : 357-66.

Isbell, William

2010 Agency, Identity, and Control: Understanding Wari Space and Power. In J. Jennings (ed.) : Beyond Wari Walls: Regional Perspectives on Middle Horizon Peru. pp. 233-254. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Isbell, William H. and Antti Korpisaari

2012 Burial in the Wari and the Tiwanaku Heartlands: Similarities, Differences, and Meanings. Diálogo Andino 39 : 91-122.

Janusek, John W.

1994 State and Local Power in a Prehispanic Andean Polity: Changing Patterns of Urban Residence in Tiwanaku and Lukurmata, Bolivia. Unpublished Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Chicago.

2008 Ancient Tiwanaku. Cambridge University Press, Cambridge.

松本雄一

2013 「神殿における儀礼と廃棄—中央アンデス形成期の事例から」『年報人類学研究』(3) : 1-41

Manrique Valdivia, Julio y Yoshifumi Sato

2007 Proyecto de Investigación Arqueológica de Palermo, Provincia de Chucuito, Departamento de Puno, Perú: Informe de Proyecto. Informe del proyecto presentado al Instituto Nacional de Cultura, Lima, Perú.

2009 Proyecto de Investigación Arqueológica de Palermo, Provincia de Chucuito, Departamento de Puno, Perú: Informe de Proyecto-Temporada 2007-08. Informe del proyecto presentado al Instituto Nacional de Cultura, Lima, Perú.

Moore, Jerry

2010 Making A Huaca: Memory and Praxis in Prehispanic Far Northern Peru. Journal of

Social Archaeology 10 : 398-422.

Rivera Sundt, Oswaldo

1989 Centro Ceremonial. In A. L. Kolata (ed.) : Arqueología de Lukurmata. Vol.2. pp. 59-88.  
Instituto Nacional de Arqueología, La Paz.

Seddon, Mathew T.

1998 Ritual, Power, and the Development of A Complex Society: The Island of the Sun and the Tiwanaku State. Unpublished Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, The University of Chicago, Chicago.

Sillar, Bill

2009 The Social Agency of Things? : Animism and Materiality in the Andes. Cambridge Archaeological Journal 19(3) : 369–79.

Stanish, Charles, Edmundo de la Vega M., Lee H. Steadman, Cecilia Chávez Justo, Kirk L. Frye, Luperio Onofre Mamani, Matthew T. Seddon, and Percy Calisaya Chuquimia

1997 Archaeological Survey in the Juli-Desaguadero Area, Lake Titicaca Basin, Peru. Fieldiana: Anthropology, New Series 29. Field Museum of Natural History, Chicago.

Stanish, Charles, Kirk L. Frye, Edmundo de la Vega M. and Matthew T. Seddon

2005 Tiwanaku Expansion into the Western Titicaca Basin, Peru. In C. Stanish, A. B. Cohen and M. S. Aldenderfer (eds.) : Advances in Titicaca Basin Archaeology-I. pp.103-114. Cotsen Institute of Archaeology at UCLA, Los Angeles.

Szremiski, Kasia, Brendan J. M. Weaver, Géron Levi-Lazzaris, Steven A. Wernke, Miriam Shakow, Tiffany A. Tung, and Tom D. Dillehay

2009 Materiality, Ontology, and the Andes. Paper for The Vanderbilt-Chicago-Harvard Workshop for Andean Anthropology 2009.

[http://www.vanderbilt.edu/vanchivard/wordpress/wp-content/uploads/2009/04/vanderbilt\\_vanchivard\\_position\\_paper\\_2009.pdf](http://www.vanderbilt.edu/vanchivard/wordpress/wp-content/uploads/2009/04/vanderbilt_vanchivard_position_paper_2009.pdf) 【2013年4月26日現在】

Trever, L., A. Stack, C. Brezine, T. Cummins, N. Elphick, A. Hamilton, M. Koons, J. Quilter, G. Urton, and N. Vanvalkenburgh

2009 Materiality, Ontology, and the Andes. Paper for The Vanderbilt-Chicago-Harvard Workshop for Andean Anthropology 2009.

<http://www.vanderbilt.edu/vanchivard/wordpress/wp-content/uploads/2009/04/position-paper1.pdf>  
【2013年4月26日現在】

【参考資料】

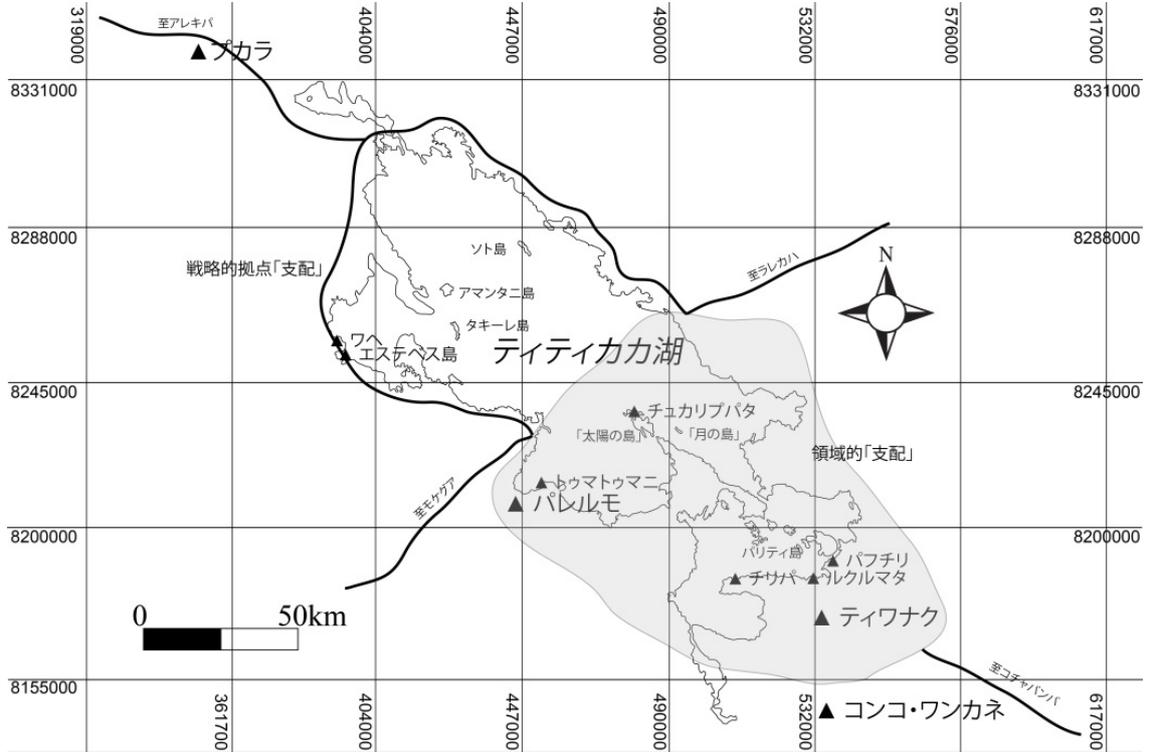


図1 ティワナクの仮説的「地方支配」モデルとパレルモ遺跡

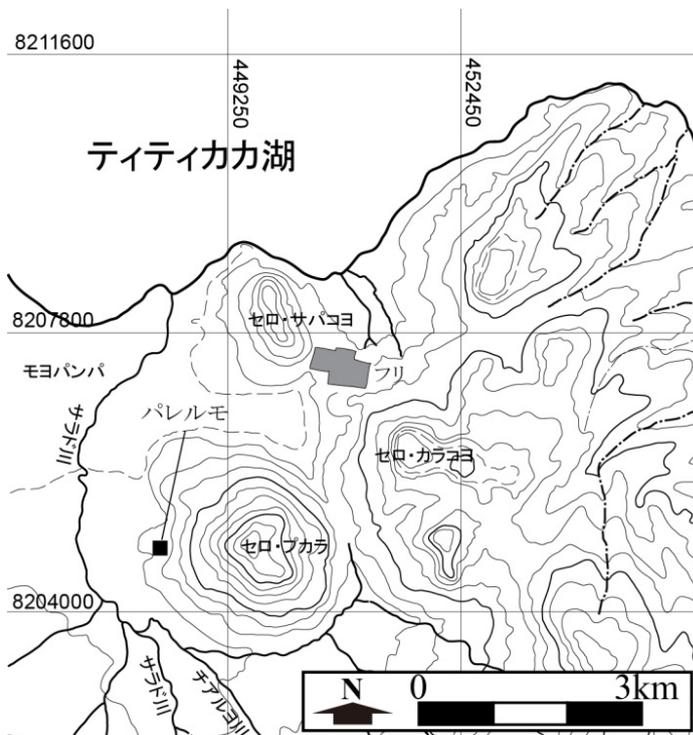


図2 パレルモ遺跡の位置

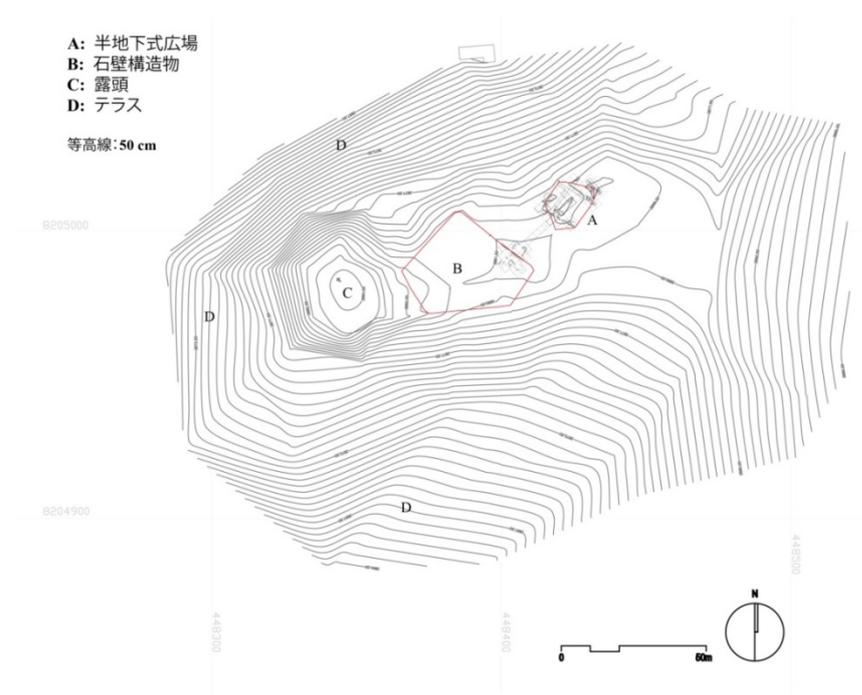


図3 パレルモ遺跡の地形

表1 ティティカカ湖盆地の考古学編年

時期	地域	湖北地域	湖西地域	湖西地域南部	湖南地域
インカ期 A.D.1450-1532		インカ期 A.D.1450-1532	インカ期 A.D.1450-1532	インカ期 A.D.1450-1532	バカヘ期 後期: A.D.1540-1570 中期 (インカ期): A.D.1470-1540 前期: A.D.1150-1470
地方発展期 A.D.1150-1450		コヤ期 A.D.1250-1450	アルティプラノ期 A.D.1100-1450	アルティプラノ期 A.D.1100-1450	ティワナク2期 後期: A.D.1000-1150 前期: A.D.800-1000
1000					ティワナク1期 後期: A.D.600-800 前期: A.D.500-600
ティワナク期 A.D.500-1150		ティワナク拡大期 400-1100A.D.	ティワナク拡大期 A.D.400-1100	ティワナク拡大期 A.D.400-1100	形成期後期2 A.D.300-500
500					形成期後期1B A.D.250-300
形成期後期 500/200B.C.-A.D.500		ブカラ後期 A.D.100-300	ブカラ後期 A.D.100-300	シヌモック後期 200B.C.-A.D.400	形成期後期1A 200B.C.-A.D.250
紀元後		ブカラ中期 200B.C.-A.D.100	ブカラ期 2期: 100B.C.-A.D.100 1期: 300-100B.C.		
紀元前		ブカラ前期 (クシパタ並行期) 500-200B.C.	ブカラ前期 400-300B.C.	シヌモック前期 800-200B.C.	チリバ後期 800-200B.C.
500		ブカラ移行期 (カルユ並行期) 850-500B.C.	カルユ後期 2期: 650-400B.C. 1期: 850-650B.C.		
形成期中期 1300/900-500/200B.C.			カルユ前期 2期: 1050-850B.C. 1期: 1200-1050B.C.	バシリ期 1300-800B.C.	チリバ中期 1000-800B.C.
1000		先ブカラ期中期 (カルユ並行期) 1400-850B.C.			チリバ前期 1500-1000B.C.
形成期前期 1800/1300-			古期 1750-1200B.C.		
1500		先ブカラ期前期 ?-1400B.C.		古期後期	
先王器時代 2000					

